

二〇一六年度 大学入学共通テスト 解説 〈現代文〉

第1問 評論 櫻井あすみ 「贈与」としての美術・ABR

【総括】

「美」や「芸術」が必然的に内包する、言語的に理解不可能な「わかりえなさ」に関する文章。選択肢の数が全ての設問で4つであり、その点では昨年同様、受験生の負担感は少なかつたと思われるが、昨年に比べて紛らわしい選択肢が多く、また、本文の分量も昨年より五〇〇字程度増加し、全体としての難易度は昨年よりやや増した。

【解説】

問1 漢字問題 基礎

傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

- | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|----|------|------|-----|-----|------|
| (ア) | (イ) | (ウ) | (エ) | (オ) | 肩 | 透かして | 健脚 | 空拳 | 堅実 | 比肩 |
| | | | | | 塗料 | ○①塗布 | ①陶酔 | ②逃亡 | ③哀悼 | ○④浸透 |
| | | | | | 根幹 | ○②基幹 | ②吐露 | ③前途 | ④渡来 | |
| | | | | | 尺度 | ①乾電池 | ③慣用句 | ④貫通 | ⑤証明 | ⑥磁石 |
| | | | | | | ①借用 | ○②縮尺 | ③釈明 | ④磁石 | |

(ア)の④「比肩」の意味は「肩を並べること。同等であること。匹敵」。

(エ)の「根幹」、(オ)の「基幹」はどちらも「幹」という字を含み、「物事の最も重要で中心となる部分」を意味するが、「根幹」は「物事の本質・核心」というニュアンス、「基幹」は「組織やシステムの柱・軸」というニュアンスで用いられる。

漢字の学習は、単に知識問題のためのものではなく、読解力の基礎となる語彙力をつけるためのものもある。積極的に学習時間に取り入れよう。その際、音読→訓読の行き来ができるようにしておくと、漢字を忘れにくくなるだけでなく熟語の意味を推測できるようになるので読解力の向上につながる。大まかに言えば、「音読は中国語読み、訓読は日本語読み」というイメージである。

(ウ)を例にとると、

「塗料」→塗るための材料、①「塗布」→塗り広げる（「布」には〈広く行き渡らせる〉の意がある。「布教」「流布」など）、②「吐露」→あらわに吐く＝包み隠さずに打ち明ける、③「前途」→前にひろがる途^{みち}＝将来・行く先、④「渡來」→外国から海を渡つて来ること。

問2 内容説明問題 標準

傍線部A 「それは日々のコミュニケーションの中で感じる他者のわからなさとは異なり、不思議な心地よさを味わわせてくれるものだつた。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

解答にあたつて把握すべきことは次の二点。

- ① 「それ」＝「不思議な心地よさを味わわせてくれるもの」の内容
- ② 「日々のコミュニケーションの中で感じる他者のわからなさ」の内容

①について。傍線部の「それ」という指示語の内容を把握する。
「それ」＝言葉で把握不可能な「他者」の存在

＝筆者にとってある種の「美しさ」を備えたものとして立ち現れる、何ということのないありふれた景色の一部
＝筆者に「不思議な心地よさを味わわせてくれるもの」

※傍線部に指示語が含まれる場合、その指示語は設問を解く上で重要な手がかりとなる。普段から文中の指示語の指示内容を把握しながら読む癖をつけよう。

②について。「それ」と対比される「日々のコミュニケーションの中で感じる他者のわからなさ」の内容を把握する。第1～2段落の内容から、他の子どもたちが共有している「見えない約束事」が、幼少期の筆者にはうまく理解できなかつたことがわかる。「日々のコミュニケーションの中で感

じる他者のわからなさ」は、そのことに由来しているだろう。

対比的にまとめると、①は他の人と共有される必要のない、「自分がだけのわからなさ」であり、それは筆者に「不思議な心地よさを味わわせてくれる」のに対し、②は他の人と共有される必要があるにもかかわらず、筆者にはうまく理解できない「見えない約束事」のわからなさであり、それは筆者に人とのコミュニケーションの居心地の悪さを感じさせていた、ということになる。

以上をふまえて選択肢を検討すると、正解は③。

①は「それを素直に感じられることに言い知れない心地よさを覚えていた」という点が誤り。筆者が心地よさを覚えていたのは①でみた〈言葉で把握できない、ありふれた景色の一部のわからなさ〉に対してであつて、そのような景色の美しさを「素直に感じられること」に対してではない。

②は「自分自身に対する理解を深めていくことに言い知れない心地よさを覚えていた」という点が誤り。

④は「他者の求めるルールや基準を放棄し、世界や自己の感覚を曖昧なままに受け入れていくことに言い知れない心地よさを覚えていた」という点が誤り。

問3 内容説明問題 標準

傍線部B 「造形行為には目の前で変貌していく素材との交流という側面がある」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

傍線部の「交流」という言葉の理解が重要。「交流」とは、異なるものの間で、さまざまやりとりが行われることであるが、ここでは当然、筆者（制作者）と素材との間で行われるやりとりのことである。それは「交流」である以上、一方通行のものではなく、双方向的なやりとりでなければならぬ。したがって①制作者→素材、②素材→制作者という二点を正しく説明した選択肢が正解となる。

傍線部の直前に「バタイユが指摘するように」とあるので、傍線部Bを理解するにあたっては、一つ前の段落のバタイユの見解を把握しておくといい。

把握すべきは以下の二点。

不变の同一性を備えた「見る主体」 → 不変の同一性を備えた「見られる対象」

(壁画を描いた人)

(描かれた壁画)

一種の主体のように現れる「聖なるもの」 → 不変の存在としての自己の存在が揺らぐ

(描かれた壁画)

この図式を、制作者と素材との交流にあてはめると、次のようなだろう。

①素材と戯れ、その形や色を変質させる制作者 → 制作者によって変質される素材



②変質の結果として出現する思いもよらない素材の姿 → 思いもよらない素材の姿を受動的に味わうことで変容する制作者



傍線部の「交流」という言葉をこのように理解したうえで選択肢の検討に入ると、正解は②。

①は②の「素材→制作者」という要素がないため「交流」の説明として不適。

③も②の「素材→制作者」という要素がないため「交流」の説明として不適。

④は「形の定まらない素材」という表現が、傍線部B直後の「作品は『素材』」によって物質としての形を与えらえる」という内容と矛盾する。また「見る主体と対象との関係が逆転していく」という説明は、単に〈制作方法に素材を従わせる関係から、素材に合わせて制作方法を検討する関係への変化〉という意味に過ぎず、〈素材が制作者を変容させる〉という②の要素の説明として不正確。

問4 理由説明問題 応用

傍線部C 「冒頭からこれまでの記述は幼少期の私的な記憶の追想と、現在の制作についての（バタイユの影響を多分に含んだ）個人的な解釈にすぎない。」とあるが、筆者はなぜこのように述べるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

設問で問われていることがややわかりにくいが、この問いを、〈なぜ筆者は私的な記憶の追想と、制作についての個人的な解釈を述べてきたのか〉

というように理解するならば、その答えは傍線部直後にあるように、「こうした感覚がけしてわたし一人だけのものではなく、多くの人々にとつて、あらゆる芸術的体験の根源に関わるものではないかと、わたしには強く感じられる」から（①）、ということになるだろう。ここで、「こうした感覚」とは、傍線部Cの次の段落にあるように、「わたしが幼少の頃に体験し、現在も幾度となく繰り返しているあの感覚」であり、「何かを『美しい』と感じたその瞬間に言語的意味が剥奪され、わかりえないものへと変容していく感覚」、「それゆえに他者と完全に共有することが不可能なもの」である（②）。

こうした感覚が、なぜ「けしてわたし一人だけのものではな」いかと言えば、それは「おそらく『美』あるいは『芸術』というものの本質に関わる事柄」である（①と同義）。

ここまで確認して選択肢の検討に入る。もし、ここまで内容把握で正解を絞れなかつた場合は、さらに先の内容を読み進めてから再び戻つてくればよい。

①は、「幼少期の体験の記憶を」「制作過程でのこれまでの体験と比較し相対化する」が誤り（②と矛盾）。「こうした感覚」とは、「わたしが幼少の頃に体験し、現在も幾度となく繰り返しているあの感覚」のことであり、両者は異なるものではない。また、①はこの感覚を「芸術的体験の多様性に関わるものとして強調しようとしている」という点も誤り（①と矛盾）。この感覚は「芸術的体験の多様性に関わる」ものではなく、「根源に関わる」ものである。

②の「それが芸術の根源にもつながる問題」における「それ」とは、〈見慣れた景色がわかりえないものに変容するという幼少期の記憶〉であり、それは右に見た②「こうした感覚」の説明として正しい。また「それが芸術の根源にもつながる問題であると述べることで、私的な体験を一般に通じるものとして提起しようとしているため」という点も、右の「こうした感覚がけしてわたし一人だけのものではなく、多くの人々にとつて、あらゆる芸術的体験の根源に関わるものではないかと、わたしには強く感じられる」から、という①の要素を正しく説明している。

③の文構造をシンプルに取り出すと、「他者と共有できない『美しさ』の存在を、誰にでもわかるものとして提示しようとしているため。」となる。「『美しさ』の存在を」という目的語と「提示しよう」という述語の距離が離れているためにわかりにくいけれど、文構造を取り出すと、①の要素（「こうした感覚」がけしてわたし一人だけのものではなく、多くの人々にとつてあらゆる芸術的体験の根源に関わるものではないかと、わたしには強く感じられるから）と大きく異なる内容を述べていることがわかる。また、③は②の「こういう感覚」を、「芸術の根源にも通じる抽象的で他者と共有困難な美的概念」と説明しているが、本文における「こういう感覚」とは、筆者が幼いころから何度も味わってきた具体的な感覚であり、「抽象的な美的概念」ではない。

④は全体的に間違っている。「現在の制作過程においても繰り返し起きている」のは、「幼少期の美しい風景との出会い」ではなく、〈自分にとつての美しい風景と出会ったときの感覚〉である。また、「これらの体験が個人的な解釈にすぎないと自覚することで、芸術を主観的な価値を持つものとして説明しようとしている」という内容も、①の「こうした感覚がけしてわたし一人だけのものではなく、多くの人々にとつてあらゆる芸術的体験の根源に関わるものではないかと、わたしには強く感じられる」という内容と矛盾する。以上より、正解は②。

問5 理由説明問題 標準

傍線部D 「そのとき、暗黙の約束事を共有し、コミュニケーション可能な対象と信じられている他者の外側に、絶対的に『わかりえない』余白としての『他者』の存在が了解される。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

傍線部Dに至る文脈を整理しよう。

「美」や「芸術」は、他者と等価に交換不可能で、言語的に理解不可能な「わかりえなさ」を内包している。主観的で個人的な価値に強く支えられている「美しさ」(2)



価値尺度や概念的枠組が他者と共有されているために様々なものが交換可能な日常世界(1)のただ中から、「わかりえなさ」を内包した「美しさ」(2)が出現する

世界はその本来的な「交換不可能性」を露わにする(2)



D そのとき、世界を構成しているのは①だけではない、②も存在しているのだということが了解される

※次の段落の内容から、②=「美しいもの」、「『芸術』的な体験を通じて露わになる『交換不可能なもの』」という点もおさえる

以上の内容把握をふまえて選択肢の検討に入る。

①は②を単に「思いもよらない『美しさ』」としており、不適。

②は「共有不可能な『美しさ』が現れると、覆い隠されていたら共有可能な基準が明らかになり」という点が不適。ここで明らかになるのは「どのような基準も共有していない、したがってわかりえない『他者』の存在」である。

③は右の内容把握を正しく説明している。

④は「個人による感覚が最大限尊重される望ましい社会の姿に目を向けることができるから」という点が的外れ。以上より、正解は③。

問6 傍線部に対する筆者の考え方を説明する問題 応用

傍線部E「『作品』を制作するということ」とあるが、このことに対する筆者の考え方として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

傍線部Eを含む最終段落に「『作品』を制作するということ」に対する筆者の考えが述べられている。それはおおむね次のようなものである。「作品」を制作することは、筆者にとって、自ら能動的に「わかりえないもの」を生み出し他者へと「贈与」することであり、筆者はその「わかりえない美しさ」がいつか誰かに受け取られること、そしてその誰かの世界を揺るがすものになることを微かに期待している。

以上をふまえて選択肢の検討に入る。
①の「固定化された自己が揺るがされる」という内容は、問3で確認した、筆者の「交流」についての双方向的なあり方をふまえたものであり、妥当。また、「作品」の受容者の前にも見知らぬ世界が立ち上がるなどを、難しいながらも願っているのも、本文末尾の「その誰かの世界を揺るがすものになることを微かに期待しながら」と内容として一致する。

②は「『作品』の受容者に『美しさ』という概念の虚構性を、難しいながらも届けようとしている」が不適。筆者が「贈与」しようとするのは「『美しさ』という概念の虚構性」（「美しさ」などという概念は存在しない）ではなく、「わかりえない美しさ」である。

③は「『作品』を制作することを「かけがえのない自己」に気づくこと、としており不適。また、「『作品』の受容者の認識をよりよく変化させることを実践している」という点も誤り。認識の枠組みを揺るがすことと「よりよく変化させること」は違うし、「期待している」と「実践している」も同義ではない。

④は「誰にもわからない『美』を完成させること」が不適。たとえば第11段落に「作品はわたしの手からはみ出し、いつも見知らぬものとしてわたしの前に現れる。たとえそれが『完成』したとしても。」とあるように、筆者にとって「作品」の制作とは、自分から作品に能動的に働きかけるだけの行為ではなく、自ら生み出した「見知らぬもの」「わかりえないもの」によって自己が変容を余儀なくされることでもある（問3の解説も参照のこと）。また、本文末尾の「期待している」という表現は、その実現に自らは参与し得ないというニュアンスを含意するが、④の末尾の「目指している」という表現は、その実現に自らが参与するという意味を含むため、不適（「受験合格を期待している」と「受験合格を目指している」という例文でいえば、前者は誰かの合格を期待しており自分はそれを願うだけであるのに対し、後者は自分が合格に向けて歩んでいることを意味する）。

以上より、正解は①。

第2問 小説 遠藤周作「影に對して」

【總括】

第2問の出典は、遠藤周作の小説「影に對して」。「平凡が一番いい」と繰りかえす父、音楽の道を諦めて平凡な家庭人として生きることを強いられた母（※「ノート」には、離婚後に再び音楽に携わっていた母の後半生が垣間見られる）、主人公の勝呂の変化（とにかく母を独り占めしたかった子供時代の勝呂→平凡な人生も悪くないと思いつつ小説家の道を捨てきれない現在の勝呂）とそれに伴う母への思いの変化、これらの関係と関係の変化に心を添わせて読むことができれば正解に辿り着くのはさほど難しくはなかつた。しかし表面的な根拠を探すだけの読み方では難しく感じられたかもしれない。

設問数は昨年より1問減つたが、最後の問6では出典の本文以外の箇所を引用した「ノート」が提示され、それをもとにした生徒の対話形式の小問が二つ出題された。語彙に関する設問は昨年同様、出題がなかつた。

なお、遠藤周作の小説は二〇〇五年度の「センター試験」にも出題されており（「肉親再会」）、そのテーマも共通するものであつた。

「肉親再会」

芸術の道を諦めて日本に帰国した「私」→芸術の道を諦めずにフランスに残る妹

「影に對して」

平凡な生活も悪くないと悪い始めている勝呂 → 離婚後に再び音楽に携わった母（歩きやすいが足あとに残らないアスハルト）（歩きにくいやが足あとが残る砂浜）

[解説]

問1 内容説明問題 基礎

傍線部A 「彼女が今、何をしているのかがわかった時、勝呂の心には寂しさと怒りに似た気持とが同時にこみあげてきた。」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

解答にあたって確認・把握すべき要素は次の三点。

- ① 「彼女（母）が今、何をしているのか」の内容
- ② 勝呂の「寂しさ」の内容
- ③ 勝呂の「怒り」の内容

①について。傍線部前後の母とヴァイオリンに関する記述から、傍線部直前の「椅子に腰かけた母が、こちらに気がつかず、膝の上に肱をつくようにして、左手の指をしきりに動かしていた」という表現が意味するのは、〈ヴァイオリンを弾くような仕草〉である。

②について。傍線部の少し前の「勝呂は早く治るよりはこのまま入院が長びくことを心で願っていた。病気のおかげで、自分が母を独占できたことを子供心にも知っていたからである。ヴァイオリンから母を奪うためには、彼が治らぬことが必要だった」という記述から、勝呂の「寂しさ」とは、〈ヴァイオリンのせいで母の意識が自分に向いていないことへの寂しさ〉である。

③について。②の根拠の箇所に加え、傍線部の直後の「彼は～と母に怒鳴り、～と（母に）言いつづけた」という記述から、勝呂の「怒り」とは、〈母が病気の自分よりもヴァイオリンに意識を向けていることへの怒り〉である。

以上の三つの要素を正しく説明している選択肢が正解である。どの選択肢も次に示すような同じ構造を取っていることに着目すると正解を選びやすい。

――母の様子を見て ①、――と思うとともに ②、――を覚えたということ ③。

①は特に①の説明が不適。母が今しているのは「ヴァイオリンの練習と子供の看病」との「両立」ではない。

③は特に②の説明が不適。ここでの勝呂の「寂しさ」とは、「入院生活が終わ」った後のことを考えることで生まれた寂しさではない。

④は特に③の説明が不適。ここで勝呂の「怒り」とは、自分よりもヴァイオリンに意識を向けている母への怒りであつて、「自分から母を奪つたヴァイオリンに対する憎しみ」ではない。

問2

理由説明問題 基礎

②が正解。

傍線部B 「父も満足そうだった。」とあるが、そのように見えたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

「父も満足そうだった」の「も」に着目すると、ヴァイオリンに熱中していた昔と違つて、普通の母親のように家庭のことを顧みるようになった母との生活が「むしょうに嬉しかった」勝呂と同様、「平凡が一番いい」としきりに繰り返す父が満足そうに見えた理由も、そのような母の変化にあるだろう。正解のイメージは〈ヴァイオリンに夢中だった母が、家庭を顧みるようになつたから〉。あるいはもっと簡単に〈母がヴァイオリンを弾かなくなつたから〉でもよいだろう。このイメージに合う③が正解。

①は全体として「庭いじり」や「草花に愛情を注ぐこと」の話になつており、正解のイメージとずれている。

②は全体として「病気」や「健康」の話になつており、正解のイメージとずれている。

④は「母は演奏の練習を休止し家族との生活に感謝しようとしていたから」という母の内面の変化を理由にしている点が誤り。51・52行目「(父に) その言葉を言われて母がどのような表情をしたかも憶えていない」などの表現から、母の内心は勝呂には伺い知れなかつたことがわかる。したがつて(勝呂から見て) 父が満足そうに見えた理由も、母の内面の変化ではなく、母の行動の変化に求めるべきである。そもそも、本文から推測できる母の気持ちは「家族との生活に感謝」というポジティブなものではなく、むしろ「音楽を諦めさせられたことへの哀しみや不満」といったネガティブなものであろう。

問3 心情説明問題 標準

55行目から69行目に見られる波線部a「哀しそうな微笑をかける」b「哀しそうにうなづく」c「哀しそうに微笑した」d「哀しそうな微笑でじっとその姿をみつめていた」を含む各場面での母の様子についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

このような設問の場合、多少面倒でも波線部が引かれている各場面に戻って、そこで母の様子を再確認した上で慎重に各選択肢を検討していく。①は「母が父の小言に対しても不満を抱いていることを勝呂にさとられないように、気をそらそうとしている」が誤り。「さとられないように、気をそらそう」とするならば、波線部aのように「哀しそうな微笑をかける」のではなく、「無理に笑顔をつくる」だろう。

②は「勝呂の存在まで腹立たしく感じてしまうほどに」が誤り。

③は「息子の憂慮を確信へと深めさせてしまっている」が誤り。息子（勝呂）がこの時の母の気持ちを理解できるようになったのは大人になつた現在であつて、まだ小学校五年生だった当時は「確信」できるほどに母の気持ちを理解してはいなかつたはずである。

④は適当。波線部dの前に「あの」とあり、「母はあの哀しそうな微笑で」という表現は、母の「哀しそうな微笑」が事あるごとに見られるものであることを伝えているが、④はそのことを「求められる役割を果たしてきたなかで染みついた表情」という表現で的確に説明している。正解。

問4 内容説明問題 標準

傍線部C「まだ小学校五年生だった彼には裏にある感情まで到底、みぬくことはできなかつたのである」とあるが、この部分の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

傍線部Cに至る文脈を確認しておこう。

既にヴァイオリン奏者として有名になつていた母の音楽学校時代の友人から、「(音楽から離れた生活は) 倖せなの」と聞かれた母は「充分、満足している」とはつきり答える。まだ小学生だった勝呂は、その返事を嬉しい気持ちで聞いていたが、今、考えれば、あの母の返事(「充分、満足している」)は音楽学校時代の友人への対抗心から出たことがわかるが、まだ小学校五年生だった彼(勝呂)には裏にある感情まで到底、みぬくことはできなかつたのである。

傍線部Cを理解する上で把握すべき要素は次の三つ。

①当時の勝呂は母の返事をどのように受けとっていたか。

↓母がヴァイオリンを弾かなくなつた今の生活(=家庭生活を大切にする生活)に満足していることが嬉しい(もうヴァイオリンに母を奪われる心配がないから)。

②今の勝呂は母の返事の裏にある感情をどのように理解しているか。

↓音楽学校時代の友人への対抗心に由来する感情(自分が進みたかった音楽の道を歩んでいる友人に対する悔しさから、「幸せではない」とは言いたくない、負け惜しみのような感情)。

③なぜ今の勝呂は、当時の母の感情を理解することができるのか?

↓似た境遇に置かれているから(当時の母と同じように、今の勝呂は理想(=小説家志望)を抱きながらも、それを実現できていない生き方をしているから)。

どの選択肢も次に示すような同じ構造を取つていて、正解を選びやすい。

当時の勝呂は――だった(①)。しかし、勝呂が――今は(③)、――を理解している(②)。

以上をふまえて、各選択肢の検討に入る。

①は、①～③の全てを正しく説明している。正解。

②は、③を「勝呂が自分でも伴侶を得た今は」としている点が誤り。また、②を「友人が暗に非難している父をかばおうとする母の気持ちが込められていたことを理解している」としている点も誤り。

③はそもそも「母の返事」を「指がなまつてしまつた」としている点が誤り。また③を「勝呂が自分も子供を持った今は」としている点も誤り。さらに②を「子供を育てながら音楽を続けていくことの難しさに無理解な友人への不満が含まれていたことを理解している」としている点も誤り。

④は①を「少年時代の勝呂は、母の答えが自分への愛情ゆえに言ってくれたものだと思って嬉しく聞いていた」としている点が誤り。また②の要素も明確に誤り。

問5 表現に関する問題 標準

本文の表現に関する説明として適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

選択肢を一つずつ検討していく。「適当でないもの」を選ぶことに注意。

①は適当。15～18行目にかけての描写は、「～はわからない。」「～わからない。」と、伯母や母の内面についての判断は保留しつつ、「とに角、その真夜中、勝呂は額にあの指を感じて眼をさました。母は泣いていた。」と、自分の見た光景については明確な事実として記述している。

②は不適当。たしかに本文では、勝呂の少年期と現在の両方で「ホットケーキ」や「アイスクリーム」という共通のものが描かれているが、少年期の「ホットケーキ」や「アイスクリーム」は、理想の生き方を捨て平凡な生活を強いられた母が哀しみのなかで勝呂に与えたものであるのに対し、現在の場面に登場する「ホットケーキ」や「アイスクリーム」は、理想を追う生き方ではなく平凡な生活も悪くないと想い始めている勝呂が妻子に与えたものであり、「ホットケーキ」や「アイスクリーム」という「共通のもの」を描くことが、当時の母と現在の勝呂とのあいだにある鮮明なコントラストを浮き立たせている。②はそれを「西洋文化の伝播の象徴」、「現在の状況と過去の記憶を比較する役割」と説明しており、明らかに的外れ。

③は適当。「苦力」^{クーリー}や「馬車」^{マチャ}といった言葉は日本語の響きとは異なるものであり、おそらくは戦前の中中国大陸で使われていた言葉であろうことは想像に難くないだろう。

④は適当。66行目には「こういうような生活が一年つづいた」とあり、それに続く「誰も母がヴァイオリンを弾かなくなつたことを不思議には思わない」「彼女が普通の主婦と同様に～ているのを見ても、変つたと言う者もいなくなつた」という表現は、「今はもう～を不思議には思わない」→当初は不思議に思っていた、〈今では～変わつたという者もいなくなつた〉→当初は変わつたという者もいた、ということであり、④の「当初は意外性をもつて受け止められていたことが婉曲的に（間接的に・遠回しに）示されている」という説明は妥当である。

したがつて、正解（「適当でないもの」）は②。

問6 心情説明問題 応用

授業で本文を読んだNさんは、二重傍線部「その時、まるで残酷な悪戯のように勝呂の頭にあの母の死顔が浮かんできた。」という表現が最も印象に残った。これについてより深く考えるために、Nさんは「影に対して」の全文を読んでみた。Nさんは二重傍線部から抱いた疑問点二つを挙げたうえで、それぞれに関わると考えた場面を抜粋し考察したものを次の【ノート】にまとめた。後に示すのは、【ノート】とそれに基づいたNさんとYさんの対話である。これらを読んで、後の(i)・(ii)の問い合わせに答えよ。

(i) 空欄 I には「ノート」における抜粋部分を根拠とした発言が入る。ここに入るものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

空欄 I に入るのは母の後半生の生き方だから、特に「抜粋②」の母からの手紙が根拠となる。「自分の足あと」が一つも残らない「アスハルトの道」ではなく、「海の砂浜」のように「歩きにくいけれどもうしろをふりかえれば、自分の足あとが一つ一つ残っている」。「そんな人生を母さんは選びました」とあることから、①の後半「誰もが歩める安全な道ではなく、自分にしか歩めない道を進んでいこうとした」という内容が適当とわかる。①の前半部分も「抜粋①」の内容と合致する。正解は①。

② 「その厳しさに最後はくじけてしまった悲惨な人生」が誤り。抜粋部分にそれを示すような内容は書かれていない。

③ の前半部分「家族の意向を優先して時に自分を抑えることを強いられた哀れな人生」は誤り。抜粋部分にそれを示すような内容は書かれていない。また、③は後半部分の「自分が偉業を成し遂げることを追い求めた」も誤り。「海の砂浜」を歩むような人生とは、「自分の足あとが一つ一つ残っている」人生、すなわち、「自分だけの人生」ということであり、必ずしも「偉業を成し遂げることを追い求め」るような人生ではない。

④ の「憐れで情けない人生」という表現は、父からすればそのように見えたかもしれないが、母自身は、「海の砂浜」を歩むような自分の人生に誇りを持っていたことが「抜粋②」の手紙からはうかがわれる所以、不適切な表現である。また「選んだ道が自分のためでなく、息子への教えになるように」という点も誤り。自分での道を選んだのは息子のためではなく、自分のためであろう。

(ii) 空欄 □ II には本文と【ノート】における抜粋部分を根拠とした発言が入る。ここに入るものとして最も適当なものを、次の①～

- ④ のうちから一つ選べ。

空欄 □ II には、Yさんの言葉「母のことは美化されて想起されてもよいはずなのに、なぜそれを『まるで残酷な悪戯のように』と勝呂は感じたのでしょうか」という問い合わせに対する解釈が入る（後述の③の要素）。そしてこの解釈は、空欄 □ II の直前にあるように、勝呂の頭に「母の死顔」が浮かんだタイミングと状況を踏まえたものである。

以上から、把握すべき要素は次の三点。

- ① 勝呂の心に「母の死顔」が浮かんだタイミングと状況はどのようなものか（本文が根拠）
- ② 「母の死顔」は勝呂に何を想起させるか（抜粋部分が根拠）
- ③ なぜ「母の死顔」が浮かぶことが「まるで残酷な悪戯のように」感じられたのか

①について。根拠となるのは本文22～38行目の現在の勝呂の状況が描かれている箇所である。特に二重傍線部直前の「こういう生活がなぜ悪いんだと急に考えた。なぜ今更、小説を書く必要があるんだ。俺はこうして結構やつていてるじゃないか。なぜこの結構な毎日を自分で恥ずかしがる必要があるんだと思った」という箇所は、「小説家志望の勝呂が、その自分の理想を捨てて平凡な生活に安住しようと思い始めている状況」を示している。

②について。「母の死顔」が勝呂に想起させるのは、問6(i)で見た「母の生き方」だろう。すなわち、「誰もが歩める安全なアスハルトの道ではなく、自分にしか歩めない海の砂浜のような道を進んでいこうとした母の人生」である。

③について。なぜ「母の死顔」が浮かぶことが「まるで残酷な悪戯のように」勝呂に感じられたのが、それは右に見てきた①と②から推測できる。勝呂がこの時おかれていた状況とは、「小説家志望の勝呂が、その自分の理想を捨てて平凡な生活に安住しようと思い始めている状況」であり（①）、そのような生き方は「誰もが歩める安全なアスハルトの道ではなく、自分にしか歩めない海の砂浜のような道を進んでいこうとした母の人生」（②）と正反対のものである。したがって、この時の勝呂にとって「母の死顔」とは、「悪くないと想い始めていた平凡な道への歩みを思いとどまらせるようなもの」（③）であり、このタイミングで「母の死顔」が頭に浮かんだことは勝呂にとって「まるで残酷な悪戯のように」感じられたのである。

以上から、正解は④。

①は③の要素を、「勝呂にとつて母は別居した後も自分を気遣ってくれた存在で、そのような母を独り死なせてしまった後悔をより鮮明に呼び起すところに『残酷な悪戯』としての認識がある」としている点が誤り。

②は③の要素を「勝呂にとつて母の行為は愛情を感じるもので、時に行き過ぎた愛情としての独善性や束縛をも感じるところに『残酷な悪戯』としての認識がある」としている点が誤り。

③は「母が責めているように感じる」としているが、「母の死顔」はあくまでも〈母の生き方〉を想起させるものであって、それによつて自分で自分を責めることはあるにせよ、「母が責めているように感じ」させるものではないだろう。また選択肢後半に「母の教えを守れなかつたことは彼に反省を迫るもので」とあるが、まだ勝呂は完全に自分の理想を捨てたわけではなく、小説家を志望しながらも、翻訳の仕事で生計を立てられるならそれもいいと思い始めているだけであつて「母の教えを守れなかつた」と完了形で言い切ることはできないはずである。

第3問 実用的な文章

【資料Ⅰ】 「科学的な内容の絵本の編集者へのインタビュー記事の抜粋」（山形昌也氏へのインタビュー記事「科学絵本のアプローチ」をもとに作成）

【資料Ⅱ】 Mさんによる絵本『イワシ むれで いきる さかな』の抜粋とまとめ（大曾忠明『イワシ むれで いきる さかな』をもとに作成）

【資料Ⅲ】 イワシに関する他の本の抜粋（東京水産振興会『世界はイワシでできている？』をもとに作成）

〔総括〕

第3問は昨年（二〇二五年）度から導入された実用的な文章に関する問題である。全体のテーマは、「自分の好きな本を一冊選び、その本にどのような工夫が見られるかについて考える」というものであり、具体的にはMさんが取り上げた絵本の工夫に焦点が当てられた問題であった。Mさんが自分の考えを下書きした【文章】と、【文章】を書くためにMさんが準備した【資料Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ】が提示され、それに関する設問が問1～問3まで設定されている。マーク数は昨年同様5つだった。【資料】にグラフは含まれず、したがってグラフの読み取りに関する設問はなかったが、全体として出題意図の見えにくい設問が多く、制限時間の中での解答を強いられる受験生にとっては取り組みづらい問題だったと思われる。難しさの種類が昨年とは違うものの、平均点は昨年並みと予想される。想定される解答時間は10～15分程度。

〔解説〕

問1 【文章】の表現を修正する問題 標準

Mさんは、【文章】の②段落にある傍線部「読者に感じてほしいことを強く打ち出しながら」について、【資料Ⅰ】と【資料Ⅱ】を見直した結果、より具体的な表現に修正することにした。修正後の表現として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

【文章】の②段落の内容から、傍線部の「読者に感じてほしいこと」＝「伝えたいメッセージ」とは、「イワシは群れて生きる」ということだとわかる。その上で、【資料Ⅱ】に矛盾しない選択肢を選ぶ。

①と②は、「イワシは群れて生きる」というメッセージにそぐわない。

③は「食べられたり捕まえられたりしつつも生き残ったものが命をつないでいくというイワシの営み」とあり、個体で生きるのではなく、「群れて生きる」がゆえに生き延びができるイワシのあり方を説明しており、かつ、【資料Ⅱ】の後半の内容（中間部分のあらすじのまとめ）・（最終

ページの抜粋）とも矛盾しない。これが正解。

④は「群れごと食べられたりしても仲間との共生を好む」という箇所が、【資料Ⅱ】の内容（「群れて生きる」がゆえに生き延びることができるという後半の内容）にそぐわない。

問2

【文章】の③段落の趣旨にそぐわない箇所を指摘する問題 標準

【文章】の③段落を読み直したMさんは、この段落の趣旨にそぐわない箇所を削除することにした。削除する箇所として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

まずは「③段落の趣旨」を把握する。③段落冒頭の「絵本に込められた短いメッセージは、ストーリーという形で肉づけされている」と、段落末尾の「このようなストーリーによって子どもたちを絵本の世界に引き込みつつ、イワシの種としての生き方を伝えている」が趣旨にあたるだろう。つまり、「イワシは群れて生きる」というメッセージを伝えるために、子どもたちを引き込むストーリーがある」というのがこの段落の趣旨であり、4つの選択肢の中からこの趣旨にそぐわないものを選べばよいということになる。より簡潔に言えば、4つの選択肢の中から「ストーリーではないもの」を選べ、ということだ。

①・②・④はストーリーであり、右の趣旨にかなう内容であると言えるが、③は、イワシが他の生き物に食べられる姿を描いたものであり、③それ 자체をストーリーとはできない。「『バシャーン！』という音」は「擬音語」のことと、ストーリーを効果的にするための表現に属する事柄である。正解は③。

問3

Mさんは、『イワシ むれで いきる さかな』の特徴を明らかにするために、他の本と比較した内容を【文章】の④段落にある空欄 X に書くことにしている。そのため、【資料Ⅱ】で描かれたイワシの種類がマイワシであることを確認し、比較対象として次の【資料Ⅲ】を準備した。これを読んで、後の(i)・(ii)の問い合わせに答えよ。

(i) 二つの【資料】を比較し、それぞれの特徴を読み取る問題 応用

Mさんは、空欄 **X** に書く内容の準備として【資料Ⅱ】と【資料Ⅲ】を比較し、それぞれの特徴を次の表にまとめた。a欄とb欄に書くこととして誤りを含むものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。

「内容一致問題」を解くときの要領で、選択肢の内容と、【資料Ⅱ】・【資料Ⅲ】の該当箇所を照合し、消去法で解答する。制限時間の厳しい中だが、慎重に一つずつ見ていくしかない。

① aは誤りとは言えないが、bは明確に誤り。【資料Ⅲ】図2は「餌の捕食方法を、視覚的に示している」ものではない。

② aもbもそれぞれ【資料Ⅱ】と【資料Ⅲ】の特徴として正しい。

③ a 「ています」「てきます」という文末表現は、いま目の前で起こっていることを描写するような臨場感を与える表現であり、「精選した情報をアリティーをもって伝えようとしている」と言えるので【資料Ⅱ】の特徴として正しい。また、【資料Ⅲ】は、産卵→ふ化→黒潮の流れまかせの50日間、自力で回遊をはじめるそれ以降、という流れで説明されているので、bの「時系列に沿って事実を伝えようとしている」も正しい。

④ aもbもそれぞれ【資料Ⅱ】と【資料Ⅲ】の特徴として正しい。

⑤ 【資料Ⅱ】は、一つのイワシの群れに起きた出来事を述べるスタイルで書かれているのに対し、【資料Ⅲ】はマイワシという種全体の生態を概括的に述べるスタイルで書かれている。したがってaもbもそれぞれ【資料Ⅱ】と【資料Ⅲ】の特徴として正しい。

⑥ a 「情報を限定して短い文で書き表していくことや、生き物の世界の厳しさを強調し過ぎないようにしている」という因果関係が誤り。前半部分がたとえば〈クロテスクな描写を避けることで〉や〈捕食される場面を描かないことで〉などであれば、「生き物の世界の厳しさを強調し過ぎないようにしている」という後半の内容と因果的に結びつくが、「短い文で書き表していくこと」は緊迫感を生み出し厳しさを表すことにはつながつてもそれを「強調し過ぎない」ことにはつながらない。⑥のbは正しい。

正解は①と⑥。

(ii) 二つの【資料】の比較結果の分析と今後の方針の内容を問う問題 応用

Mさんは、【資料Ⅱ】に見られる工夫を考察するため、【資料Ⅱ】と【資料Ⅲ】の比較結果の分析に基づいて、今後の方針を考えている。比較結果の分析と今後の方針の内容として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

リード文にあるように、Mさんに与えられた課題が、あくまでも「自分の好きな本を一冊選び、その本にどのような工夫が見られるかについて考える」であることを踏まえて選択肢を検討する。初年（二〇二五年）度もそうだったが、「全体のテーマを踏まえた上で各設問にあたる」という姿勢が、第3問を解く上では必須である。

Mさんの選んだ「自分の好きな本」は『イワシ むれで いきる さかな』であり、この本に「どのような工夫が見られるかについて考える」ことがMさんに与えられた課題なのだから、Mさんの「今後の方針」は、【資料Ⅱ】（Mさんによる絵本『イワシ むれで いきる さかな』の抜粋とともに）を他の様々な本と比較することで、そこに「どのような工夫が見られるか」をさらに考えていくことになるだろう。

以上に述べた「今後の方針の内容」という観点から各選択肢を検討すると、②の「さまざまな科学的な内容の本を用意して【資料Ⅲ】と比較する」、④の「さまざまな絵本を用意して【資料Ⅲ】と比較する」は誤り。あくまでも「自分の好きな本（【資料Ⅱ】）」に「どのような工夫が見られるかについて考える」のだから、他の本と【資料Ⅲ】とを比較するのではなく、他の本と【資料Ⅱ】とを比較するのでなければならない。

以上を踏まえて①と③を読み比べると、

①は「これらの特徴が【資料Ⅱ】に特有のものかどうかを検討する」が「今後の方針の内容として」不適当。比較の対象を「科学的な内容の絵本」に限定している点も適切でない。

③は「【資料Ⅱ】に他の特徴がないかどうかを検討するために、さまざまな本を用意して【資料Ⅱ】と比較する」とあり、「今後の方針の内容」として適當である。

ところで、右に示した解答プロセスとは別に、各選択肢の前半部分（「【資料Ⅱ】には、情報の取捨選択や」といった、子どもに生き物の世界の魅力を伝えることにつながる複数の特徴があることがわかった）に着目して、右の「」の部分が正しいかどうかを検討するという方法もある。すると、①は【資料Ⅱ】の特徴として「独創的なストーリー展開」とあるのが不適当。実際のイワシの生態に基づく絵本である以上、「独創的なストーリー展開」とはいえない。

②は【資料Ⅱ】の特徴として「個別事例の詳述」とあるのは不適当。一つの群れに起きた出来事を描写するスタイルではあるが、それは他の群れと異なる個別性を持つた群れではないのだから「個別事例の詳述」とはいえない。

③は【資料Ⅱ】の特徴として「臨場感のある描写」とあるのは適當（問3(i)の③aの解説参照のこと）。

④は【資料Ⅱ】の特徴として「情感あふれる表現」とあるのはやや不適當。たしかに【資料Ⅱ】は子どもたちを絵本の世界に引き込むストーリーを持つてはいるが、「情感あふれる表現」とは、〈人の心に深く訴えかけてくる表現〉ということであり、事実ベースの絵本である【資料Ⅱ】の特徴を表す言葉としては適当でない。

以上より、正解は③。